



# 令和8年度 果樹情報 第5号

(令和8年5月22日)



福島県農林水産部農業振興課

## 1 気象概況 (5月前半、果樹研究所)

平均気温は、第1半旬が15.2℃で平年より0.7℃低く、第2半旬が17.1℃で平年より1.5℃高く、第3半旬が16.8℃で平年より0.9℃高く経過しました。

この期間の降水量は33.0mmで平年比94%と平年より少なくなりました。日照時間は132.8時間で平年比114%と平年より多くなりました。

## 2 土壌水分 (5月17日現在、果樹研究所)

5月17日時点の土壌水分 (pF 値：果樹研究所ナシほ場：草生・無かん水) は、深さ40cm で2.5、深さ60cm で2.4となっており、概ね適湿状態です (図1)。なお、5月15日時点では、深さ20cm で2.6となっています (図1、4月25日～5月7日、5月16日～17日はデータ欠損)。

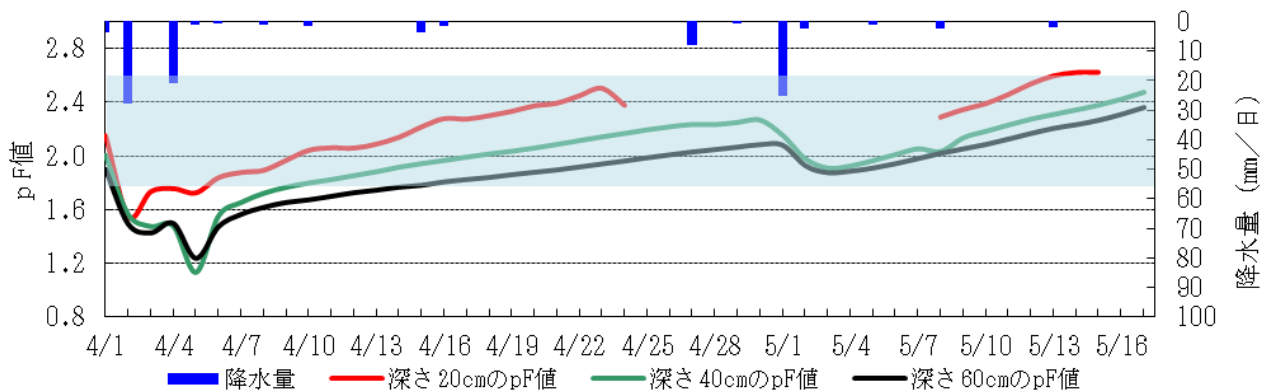


図1 土壌 pF 値の推移 (果樹研究所ナシほ場：草生・無かん水)  
図中の網掛け部は、適湿の範囲 (pF1.8-2.6) を示す

## 3 発育状況 (5月18日現在)

### (1) もも

#### ア 果実肥大

満開後30日における「あかつき」の果実肥大は、縦径が23.4mmで平年比103%、側径が15.8mmで平年比106%と平年並～やや大きくなっています。「ゆうぞら」の果実肥大は、縦径が23.3mmで平年比103%、側径が13.9mmで平年比101%と平年並です (表1)。

#### イ 新梢生長

満開後30日における「あかつき」の新梢長は平年比70%と平年よりかなり短く、展葉数は平年比110%と平年より多く、葉色は平年比106%と平年よりやや高くなりました。「ゆうぞら」の新梢長は平年比76%と平年よりかなり短く、展葉数は平年比104%で平年並、葉色は平年比108%と平年よりやや高くなりました (表1)。

#### ウ 双胚果の発生

満開後30日における「あかつき」の双胚果発生率は0.8%で平年(8.3%)よりかなり少なく、「ゆうぞら」は20.0%で平年(23.3%)より少なくなりました (表2)。

#### エ 核障害の発生

満開後30日における「あかつき」の核障害発生率は15.0%で平年(34.0%)より少なくなっています (表2)。

#### オ 発育予測

果樹研究所における、もも「はつひめ」の硬核期開始日は、気象庁の気温予報を反映した予測では6月3日ごろで平年より6日早い見込みです (表3)。また、収穫開始日は6月29日ごろで平年より6日早く、収穫盛期日は7月3日ごろで平年より5日早いと予測されます。

また、果樹研究所における、もも「あかつき」の硬核期開始日は、気象庁の気温予報を反映した予測では6月1日ごろで平年より6日早い見込みです(表4)。また、収穫開始日は7月24日で平年より5日早く、収穫盛期日は7月27日で平年より5日早いと予測されます。

なお、この時期の生育は直前の気温に左右され、今後の気温の推移により大きく変動することがあるため注意が必要です。

表1 ももの果実肥大と新梢生長(満開後30日調査)

果実肥大	縦径(mm)				横径(mm)				側径(mm)			
	本年	平年	昨年	平年比	本年	平年	昨年	平年比	本年	平年	昨年	平年比
あかつき	23.4	22.8	22.0	103	19.1	18.0	17.1	106	15.8	14.9	14.3	106
ゆうぞら	23.3	22.7	22.7	103	17.4	17.0	16.2	102	13.9	13.8	12.7	101
新梢生長	新梢長(cm)				展葉数(枚)				葉色			
	本年	平年	昨年	平年比	本年	平年	昨年	平年比	本年	平年	昨年	平年比
あかつき	3.0	4.3	4.1	70	10.3	9.4	9.5	110	44.7	42.2	42.3	106
ゆうぞら	3.9	5.1	4.2	76	10.0	9.6	10.6	104	45.1	41.8	44.9	108

注) 平年値は1996~2025年までの平均値。

表2 もも品種別の双胚果発生と核障害発生状況(満開後30日調査)

	はつひめ	日川白鳳	暁星	ふくあかり	あかつき	まどか	川中島白桃	ゆうぞら
双胚果発生率(%)	本年	5.6	0.0	1.7	1.7	0.8	3.3	1.7
	昨年	11.7	2.5	0.0	4.2	6.7	0.0	0.0
	過去10年	9.6	6.0	10.4	6.2	9.0	8.5	7.6
	平年	—	—	—	—	8.3	—	5.9
核障害発生率(%)	本年	2.2	3.3	0.0	0.0	15.0	6.7	0.0
	昨年	11.7	2.5	17.5	0.0	30.0	26.7	3.3
	過去10年	18.0	2.3	14.0	3.2	30.1	27.8	2.6
	平年	—	—	—	—	34.0	—	2.5

注) 平年は2000~2025年の平均値、過去10年は2016~2025年の平均値。

表3 もも「はつひめ」の発育予測日(果樹研究所:5月18日現在)

[予測方法:発育速度(DVR)モデルによる発育予測]

	観測日		今後の気温経過			
	昨年	平年	気象予報	2℃高い	平年並	2℃低い
硬核期開始日	6月7日	6月9日	<b>6月3日</b>	6月2日	6月3日	6月5日
収穫開始日	6月30日	7月5日	<b>6月29日</b>	6月29日	6月29日	7月1日
収穫盛期日	7月4日	7月8日	<b>7月3日</b>	7月2日	7月3日	7月5日

注1) 平年は2010~2025年の平均値。

注2) 今後の気温経過の気象予報とは、気象庁が発表している週間予報、2週間気温予報及び1ヶ月予報気温(3~4週目の平均気温)を反映し、以降の気温は平年並に経過した場合の予測値。

注3) 発育予測は誤差を生じる場合があることに留意する。

表4 もも「あかつき」の発育予測日（果樹研究所：5月18日現在）

[予測方法：発育速度（DVR）モデルによる発育予測]

	観測日		今後の気温経過			
	昨年	平年	気象予報	2℃高い	平年並	2℃低い
硬核期開始日	6月5日	6月7日	<b>6月1日</b>	5月31日	6月1日	6月3日
収穫開始日	7月25日	7月29日	<b>7月24日</b>	7月22日	7月24日	7月26日
収穫盛期日	7月29日	8月1日	<b>7月27日</b>	7月26日	7月27日	7月30日

注1) 平年は1996～2025年の平均値。

注2) 今後の気温経過の気象予報とは、気象庁が発表している週間予報、2週間気温予報及び1ヶ月予報気温（3～4週目の平均気温）を反映し、以降の気温は平年並に経過した場合の予測値。

注3) 発育予測は誤差を生じる場合があることに留意する。

(2) なし

ア 新梢生長

満開後30日における「幸水」の予備枝新梢長は35.0cm（平年比97%）と平年並、不定芽新梢長は34.0cm（平年比95%）で平年よりやや短く、予備枝新梢の葉枚数は14.3枚（平年比104%）と平年並です（表5）。

満開後30日における「豊水」の予備枝新梢長は33.6cm（平年比76%）、不定芽新梢長は33.4cm（平年比86%）で平年より短く、予備枝新梢の葉枚数は14.2枚（平年比99%）と平年並です（表5）。

表5 なしの新梢生長（幸水、豊水ともに満開後30日）

品種	予備枝新梢長(cm)			不定芽新梢長(cm)			予備枝葉数(枚)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
幸水	35.0	36.2	97	34.0	35.7	95	14.3	13.8	104
豊水	33.6	44.6	76	33.4	38.9	86	14.2	14.3	99

注) 平年値：新梢長は1996～2025年、葉枚数は1998～2025年の平均。

(3) りんご

ア 新梢生長

満開後20日における新梢長は、「つがる」が11.0cm（平年比84%）、「ふじ」が13.4cm（平年比85%）で平年より短くなっています。新梢停止率は、「つがる」が13.9%、「ふじ」が52.8%でした（表6）。

表6 りんごの新梢長及び新梢停止率（満開後20日）

品種	満開後 日数	新梢長(cm)				新梢停止率(%)	
		本年	昨年	平年	平年比	本年	昨年
つがる	20	11.0	11.3	13.1	84	13.9	6.7
ふじ	20	13.4	13.7	15.7	85	52.8	13.3

注) 新梢長平年値は、1996～2025年の平均値。

供試樹：「つがる」/M.26/マルバカイトウ20年生、「ふじ」/マルバカイトウ23年生

(4) ぶどう

ア 発育予測

発育速度（DVR）モデルによる「巨峰」の開花予測では、今後の気温が平年より2℃高く推移した場合、開花始めが5月30日ごろで平年より5日早く、満開は6月4日ごろで平年より4日早いと予測されます（表7）。

なお、この時期の生育は直前の気温に左右されるため、今後の気温の推移により大きく変動することがあるので注意が必要です。

表7 ぶどう「巨峰」の開花予測（5月18日現在）

発育ステージ	昨年		今後の気温経過と予測日		
	昨年	平年	2℃高い	平年並	2℃低い
開花始め	6月4日	6月4日	<b>5月30日</b>	5月31日	6月1日
満開	6月8日	6月8日	<b>6月4日</b>	6月5日	6月7日

注) 平年は1996～2025年の平均値。

(5) かき

ア 発育予測

会津地域研究所（会津坂下町）における、かき「会津身不知」の開花は、気象庁予報を反映した予測では5月29日ごろで平年より5日早い見込みです（表8）。

表8 かき「会津身不知」の開花予測日（会津地域研究所：5月18日現在）

[予測方法：発育速度（DVR）モデルによる発育予測]

	開花日		気象予報	今後の気温経過		
	昨年	平年		2℃高い	平年並	2℃低い
会津身不知	6月5日	6月3日	<b>5月29日</b>	5月29日	6月1日	6月4日

注1) 会津身不知の開花日の平年値は、1996～2025年の平均値。

注2) 2週間予測とは、2週間までは気象庁が発表している2週間気温予報を反映し、2週間以降の気温は平年値を用いた場合の予測値。

#### 4 栽培上の留意点

(1) 降ひょう被害の事後対策

令和8年5月13日に、一部地域で降ひょうがありました。被害が見られる場合には、以下の点に注意して管理を行いましょ。被害を受けていない園地については、(2)以降を参考にしてください。

ア 被害程度別の対策

被害程度が軽い場合は、摘果を強く実施すると樹勢が強くなるので、被害程度の軽い果実は適宜残し、樹勢をコントロールしましょう。

葉、新梢、果実の被害が大きく、それらの損傷が激しい場合は、樹の負担を軽くするため損傷程度の重い果実を摘果しましょう。

着果量は果実や樹体の損傷程度を勘案し、総合的に判断しましょう。

イ 新梢管理

新梢が途中から折損した場合には、葉腋芽のあるところまで切り戻し、腋芽の発芽を待ちましょう。新梢が被害を受けると徒長枝が発生しやすくなるので、これらを適切に管理しましょう。

ウ 病害虫防除

降ひょうにより枝葉や果実に傷がつき、病原菌が侵入しやすくなっているため、被害の多少に関わらず、防除指針及び各地域の防除暦に従い速やかに薬剤散布を実施しましょう。なお、散布は枝幹内部まで薬液が届くように丁寧に行いましょう。

エ その他

樹勢回復のために追肥を行うと、樹が強勢となり樹勢のコントロールが困難になるので控えましょう。ただし、新梢のほとんどが被害を受け落下したような場合には、発芽を促すために追肥を行いましょ。

ひょう害の技術対策については、以下の資料も参考にしてください。

- ・農業技術情報第3号「降ひょう被害が発生した農作物の技術対策（令和8年5月14日）

URL <https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/744791.pdf>

- ・作物別凍霜害及びひょう害技術対策（令和8年3月13日一部修正）

URL <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/nogyo-nousin-gijyutu03.html#kisyuu>

- ・令和4年5月及び6月に発生したひょう害の記録（令和5年3月）

URL <https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/566123.pdf>

## (2) 防霜対策

幼果期には耐凍性が最も弱くなります。引き続き気象予報に注意し、降霜のおそれがある場合は防霜対策を実施しましょう。ぶどうやかきは展葉期に凍霜害を受けると花器だけでなく新梢も障害を受けるため十分注意しましょう。

最新の情報は、福島地方気象台ホームページ「2週間気温予報」や「霜と気温の見通し」を御確認ください。

「2週間気温予報」：<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/>

「霜と気温の見通し」：<https://www.jma-net.go.jp/fukushima/shimo/shimo.html>

各樹種の生育ステージ別安全限界温度は、農業振興課ホームページの技術資料「作物別凍霜害及びひょう害技術対策（令和8年3月13日一部修正）」を参照してください。

URL <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/nogyo-nousin-gijyutu03.html#kisyoyu>

事前対策としては、防霜資材を準備するとともに、地温の上昇を図るため下草は5cm程度に刈り込みましょう。また、空気や土壌が乾燥している場合は適宜かん水を実施し、土壌水分を確保しましょう（乾燥条件は気温の低下が著しいため）。

## (3) 共通

### ア かん水

5月から夏期にかけて果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度のため、1回のかん水は25～30mm程度（10a当たり25～30t）を目安とし、5～7日間隔で実施しましょう。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くしましょう。

### イ 草刈り、マルチ

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行いましょう（地表面からの蒸発散量は、草生園において刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分とされます）。

また、刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努めましょう。

## (3) もも

この時期は新梢や果実の生育が旺盛な時期であるので、着果管理や土壌の水管理等を徹底し、新梢および果実の初期生育を促しましょう。

### ア 仕上げ摘果

仕上げ摘果は、果実肥大に差がみられ始める満開後40日頃から実施しましょう。

摘果の程度は最終着果量の1～2割増を目安としますが、樹勢や双胚果、核障害の発生状況をみながら加減しましょう。

核頂部に断裂などの重度の障害を生じた果実は、満開後45日ごろになると果頂部の片側の肥大不良が目立ってくるため、果形に注意して仕上げ摘果を実施しましょう（図2）。

### イ 樹勢回復対策

早めの摘果作業に心がけ、必要な着果数まで速やかに摘果し、新梢の生育を促進させましょう。また、乾燥傾向にある園地では、積極的にかん水を実施するなど土壌水分の確保に努めましょう。

新梢伸長が劣り、葉色が淡いなど樹勢低下がみられる園地では、早期の摘果により着果量を制限するとともに、必要に応じて5月中を目安に速効性肥料（窒素成分で2kg/10a程度）又は窒素成分を含む葉面散布剤を使用して樹勢の回復に努めましょう。



図2 核頂部の障害と果頂部の変形

#### ウ 新梢管理

5月下旬から6月中旬にかけては新梢の生育が最も盛んな時期で、樹勢の強い樹や若木等では樹冠内部が混み合ってきます。樹冠内部や主枝、垂主枝の基部、側枝の基部などから発生する徒長しやすい新梢は、早めに摘心や夏季せん定を実施し、適正な管理を心がけましょう。なお、樹勢の弱い樹では葉面積の確保を優先し、夏季せん定は行わないか最小限に止めましょう。

#### (4) なし

##### ア 摘果

「幸水」の仕上げ摘果は、肥大不良果の除去を中心に行い、満開後 50 日ごろまでに完了するように努めましょう。

##### イ 新梢管理

芽かきは、摘果と同時にを行い、主枝や垂主枝の背面枝や、不定芽新梢が混み合っている部位は 2～3 本に整理し、適度に間引きを実施しましょう。予備枝は、風により新梢が折損するおそれが無くなったなら先端新梢を一本に整理しましょう。

##### ウ 樹勢回復対策

土壌が乾燥している場合は、樹勢低下や土壌中のカルシウムの吸収不良による生理障害の発生が懸念されるため、かん水により土壌水分を確保しましょう。

平年より新梢伸長が不良で葉色が薄い場合には、早期摘果により着果量を制限するとともに、必要に応じて5月中を目安に窒素成分を含む葉面散布剤を使用するなど樹勢の回復を図りましょう。

#### (5) りんご

##### ア 予備摘果

結実が明らかになりしだい、予備摘果を開始し、満開後 30 日以内に終了するように努めましょう。原則として中心果を残し、着果の多い樹や樹勢の弱い樹から摘果を行いましょう。

結実が良好な園地では、長果枝や葉の少ない果そう及び肥大不良の果そうの果実は摘除し、着果負荷の軽減を図りましょう。また、えき芽果の着生が多い園地では、早めに摘除しましょう。

なお、予備摘果の際に果柄を取り除くと腐らん病の予防に効果的です。

##### イ 新梢管理

予備摘果と平行して、主枝や骨格枝の背面、切り口等の不定芽から発生している新梢をかき取りましょう。

##### ウ 樹勢回復対策

この時期に土壌が乾燥すると、樹勢低下やカルシウムの吸収不足による生理障害を招きやすいため、かん水により土壌水分を十分に確保しましょう。

#### (6) ぶどう

##### ア 誘引

無核栽培では強めに発生する新梢が多く、早く誘引しすぎると折れる可能性があるため、50cm 程度に伸びたころから行きましょう。また、「あづましずく」の新梢は硬く基部から折れやすいので、無理に誘引せず時期をずらして行きましょう。

##### イ 花穂整形

現在の予測では、開花は平年よりも早くなると予想されます。新梢誘引、摘穂、花穂整形は適期を逃さないよう計画的に実施しましょう。ジベレリン処理時期を逃さないように、花穂整形は遅くとも満開期までには終了しましょう。

##### ウ ジベレリン処理

樹の中で開花にばらつきがある場合は2回程度に分けてジベレリン処理を実施しましょう。

「あづましずく」ではジベレリン 50ppm 液を満開 4～7 日後頃に 1 回処理すると、実止まりや果実品質が安定します。

##### エ フルメット処理

「巨峰」や「シャインマスカット」でフルメット液剤を使用する場合は、ジベレリン 1 回目処理時か 2 回目処理時のいずれか 1 回の使用とし、使用基準を遵守しましょう。樹勢が強く、花ぶるいが心配される園地では、着粒安定を目的としてジベレリン 1 回目処理時に加用します。樹勢が弱い樹では、花ぶるいの心配は少ないが、果粒肥大が劣るおそれがあるため、ジベレリン 2 回目処理に加用しましょう。ジベレリン 2 回目処理に加用する場合は、「巨峰」では着色遅

延が起りやすいため、着果過多とならないよう注意し、「シャインマスカット」では糖度や食味が低下することに注意しましょう。

オ アグレプト液剤

無種子化を促進するためには、満開予定日の 14 日前～満開期にアグレプト液剤を使用しましょう。

## 5 病虫害防除上の留意点

現在の果樹の生育は、平年より 4～6 日早まっています。4 月は平年よりも降雨が少なく経過しましたが、今後の天候しだいでは、感染が増加するおそれがありますので、気象情報に留意し、生育に応じた計画的な防除を実施しましょう。また、耕種的防除（病斑の除去や新梢管理）を徹底し、発生密度の低減を図りましょう。

### (1) 病害

ア リンゴ褐斑病

果樹研究所における殺菌剤無散布の「ふじ」では、5 月 18 日に果そう葉、新梢葉での初発生が確認されました。

例年、褐斑病の発生が多い場合は、落花 2 週間後ごろにデランフロアブル 1,000 倍を散布しましょう。また、落花 30 日後ごろは褐斑病菌（子のう胞子）の飛散盛期となり、重要防除時期にあたります。例年、褐斑病の発生が多い場合は、アントラコール顆粒水和剤 500 倍を使用しましょう。新梢発生が旺盛となる時期なので、薬剤散布前には新梢管理を行い、枝葉の混雑による散布むらをなくしましょう。

イ リンゴ腐らん病

腐らん病の発生がみられる園地では防除を徹底しましょう。枝腐らんは健全部を 5 cm 以上含めて切り取ります。胴腐らんは周囲の健全部まで 5 cm 広く削り取り、トップジンMペーストを塗布します。伐採した被害枝幹および削りとった病患部は適切に処分しましょう。

早期摘果は枝腐らんの感染防止に有効です。特に「ふじ」は摘果が遅れると果柄が脱落しにくくなり、本病に感染しやすくなるので、早期に摘果を行いましょう。

ウ モモせん孔細菌病

本病は、発生初期の密度抑制が重要なため、今後の気象条件によっては発生が急激に増加するおそれがあります。定期的にはほ場を巡回し、伝染源である春型枝病斑の早期発見とせん除を徹底し、感染防止を図りましょう。なお、春型枝病斑のせん除は、発病部位が残らないように病斑部の周辺を含めて可能な限り基部から切り戻しましょう。また、樹冠上部での発生を見逃さないように注意し、直下への被害拡大を防止しましょう。春型枝病斑の発生は長期間にわたるため、せん除は定期的に複数回実施しましょう。

薬剤防除は、降雨前の予防散布を基本に 10 日間隔で実施しましょう。酸化亜鉛水和剤（IC ジンク水和剤）を組み入れた防除体系によって本病の被害を軽減できることが明らかになっているため（令和 6 年度普及に移しうる成果）、落花 30 日後に IC ジンク水和剤 1,000 倍を使用し、被害防止に努めましょう。なお、銅水和剤（クプロシールド）を使用する際は、薬害の発生を軽減するため、炭酸カルシウム水和剤（クレフノン 100 倍）を、必ずバケツ等で一次希釈を十分に行ってから加用しましょう。また、薬剤が沈殿しないように攪拌しながら散布を行いましょう。また、いずれの薬剤も高温時（散布後を含む）の使用や連用は、薬害が発生しやすくなるおそれがあるため避けましょう。

オ ナシ黒星病

果樹研究所における果実での発病は、4 月 30 日に初確認されました。今後の天候しだいでは、感染が増加するおそれがあるため注意が必要です。

防除対策は、果そう基部や葉・果実等の罹病部位を徹底して除去するとともに、薬剤散布は 1 週間間隔で行い、気象情報に留意し、降雨前の予防散布を心がけ、散布むらがないように十分な量を使用しましょう。新梢発生が旺盛となる時期なので、薬剤散布前には新梢管理を行い、枝葉の混雑による散布むらをなくしましょう。

## カ ぶどう黒とう病・ぶどう晩腐病

展葉5～6枚期及び展葉8～9枚期はこれら2病害の防除時期となるため、本病に有効な薬剤を散布して初期の感染を防止しましょう。

## (2) 虫害

### ア モモハモグリガ

第1世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合には、5月6半旬ごろと予測され、第2世代幼虫の防除適期は5月6半旬ごろと推定されます(表9)。

本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意しましょう。

### イ ナシヒメシンクイ

第1世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合には、6月3半旬ごろと予測され、第2世代幼虫の防除適期は6月4半旬ごろと推定されます(表9)。

本種の第1世代幼虫は、主にもも等の核果類の新梢に寄生(芯折れ症状)し、第2世代以降はなしなどの果実に移行します。例年、なしでの果実被害が多い地域では、近隣のもも等における防除も徹底しましょう。なお、薬剤による防除を実施する場合には、使用基準を守りましょう。

### ウ カイガラムシ類

ウメシロカイガラムシ第1世代のふ化盛期は5月1半旬頃と推定されました。クワシロカイガラムシのふ化盛期はウメシロカイガラムシより5～10日程度遅いですが、ウメシロカイガラムシ歩行幼虫発生期に薬剤散布することで、両種を同時防除することができます(令和5年度参考成果)。カイガラムシ類はふ化定着初期の防除が重要であるため、防除適期を逃さないようにしましょう。

ナシマルカイガラムシ第1世代のふ化開始は、気温が2℃高く推移した場合、5月6半旬頃と予測され、ふ化盛期は6月2半旬頃と推定されます(表9)。

### エ カメムシ類

病害虫防除所における果樹カメムシ類のフェロモントラップデータ(令和8年5月12日付け)によると、県内の一部地域では誘殺数が平年より多い傾向にあります。越冬世代成虫による加害は、幼果期から始まります。山間及び山沿いの園地では、飛来状況をよく観察し、多数の飛来がみられる場合には速やかに防除を行いましょう。

表9 果樹研究所における防除時期の推定(令和8年5月15日現在)

今後の 気温予測	モモハモグリガ		ナシヒメシンクイ		ナシマルカイガラムシ	
	第1世代 誘殺盛期	第2世代 防除適期	第1世代 誘殺盛期	第2世代 防除適期	第1世代 ふ化開始	第1世代 防除適期
2℃高い	5月26日	5月31日	6月11日	6月19日	5月28日	6月6日
平年並	5月28日	6月3日	6月16日	6月26日	5月31日	6月10日
2℃低い	5月30日	6月6日	6月23日	7月4日	6月3日	6月16日

起算日：モモハモグリガ越冬世代誘殺盛期 4月14日  
ナシヒメシンクイ越冬世代誘殺盛期 4月16日  
ナシマルカイガラムシ 3月1日(演算方法は三角法)

### 病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 農業革新担当 TEL 024(521)7344

(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>